

広報PJからのお願い

『南森界限歴史探訪散歩』についてのご意見、ご感想をお待ちしています。ご所属、お名前を記載の上、以下のメールアドレスまで投稿ください。

[info-shinsa◆osa-kendo.or.jp](mailto:info-shinsa@osa-kendo.or.jp)

上記メールアドレスは◆を@に変更後お使い下さい

掲載されている記事ごとに1 いいね 2 いまいちだね の選択投稿ができるようになっております。非常に簡単ですので多数のアクセスをお待ちしております。

PCの方は下記URLへ（スマホも可）

<https://forms.gle/Fid9ekk7WuWC4FMi7>

スマホの方は、下記QRコードからアクセスできます。



従来のようにメールを利用されてもかまいません。

よろしく申し上げます。

【往路】第5回 北東コース3月 JR桜ノ宮駅から事務所へ

・南森界限歴史探訪 広報誌3月号をお届けします。内容は以下のようにしております。

・「第5回 北東コース3月 JR桜ノ宮駅から事務所へ（3月さくらの時期）編」

JR桜ノ宮駅から大阪府剣道連盟事務所まで、歴史スポットを巡りながら歩く「北東コース3月」の散歩ガイドです。

源八橋・日羅公碑・木村堤・OAP（旧三菱金属製錬所跡）・寺町通の寺院群・池上雪枝感化院跡・緒方洪庵や大村益次郎ゆかりの龍海寺・五井持軒の墓がある九品寺など、歴史的背景を詳しく紹介しつつ、街並みの変遷や人物エピソードも豊富に解説しています。最終的に大剣連事務局へ到着するまでの、歴史と散策をお楽しみ下さい。

（柴田洋一 教職員クラブ）

南森界隈歴史探訪散歩

2026.3.1 発行

発行責任者 公益社団法人

大阪府剣道連盟
広報PJ

趣味で歴史散歩を研究している剣道と居合道を嗜む教職員クラブの柴田洋一先生にまとめて頂きました。皆様からの新しい発見、情報をお待ちしております。

6. 北東コース3月

《往路》①JR 桜ノ宮駅→②源八橋<撮影スポット:大阪城と大川端の桜並木>→③伝日羅公碑・源八渡し跡碑→④桜並木・豊臣時代の大川堤防(木村堤)→⑤OAP(大阪アメニティパーク)・木村重成屋敷跡・伊勢國津藩藤堂家屋敷・OAPタワー・大阪帝国ホテル(三菱金属大阪精錬所跡)→⑥専念寺のエンゼルランペット(7月)→大信寺→⑦池上雪枝感化院跡碑→⑧龍海寺の中天游墓所・緒方洪庵墓所・大村益次郎の足塚→⑨九品寺の五井持軒墓所→⑩【大剣連事務所】



地図の出典:国土地理院

さて、きょうは①JR環状線の桜ノ宮駅からです。

まず駅西口への階段を降り、左手南側へ進み、南改札口から出る。すぐ正面の桜並木が目飛び込んで、私たちが快く驚かせてくれる。駅前の自転車駐車場に沿って、堤防上の道を左手南側に進む。ここであわてて交差点の横断歩道を渡らない。交差点北東角にある「歴史の散歩道」のレンガ作りの案内柱で、行き先の方角を確かめる。落ち着いて、横断歩道を西側に渡り、橋へは進まずに左手南側にもうひとつ横断歩道を渡る。すると左手に交番が見える。交番前の看板裏側には桜之宮公園の詳しい案内図を見ることができる。



ちなみに、交番前の横断歩道を東に渡って、つぎの信号のない横断歩道の北側角に、隠れた名店、本格中国料理の華中苑がある(都島区中野町4-12-1、定休日火曜、品揃え84品)。ここは同じクラブの先輩に教えていただいた。

でも、これから進むのは、横断歩道の右手の源八橋。②源八橋を渡りだしてすぐ、左手南側の桜並木に目を奪われる。



源八橋の歩道は南側が広く、中程に金属製の説明板・源八橋がある。この橋の北側に、江戸時代のはじめにあった渡し船は、1700年頃(元禄末)にはすでに「源八の渡し」として知られていた。右岸は大阪城代配下の与力等の役宅が並び、左岸はのどかな農村地帯で、京街道にも近く、梅や桜の名所でもあった。与謝蕪村「源八をわたりてうめのあるじかな」が添えられてある。説明板を越えたあたりからは撮影スポットでもある。大川端の桜並木を、遠景の大阪城をバックに、カメラに収めるひとが多く、4月はじめの休日には、大変混雑する。一方で、北側の狭い歩道は中程で角張って膨らみ、立ち止まって鉄橋を渡る列車と桜並木を楽しむことができる。ここは鉄道マニアの撮影スポットでもある。

さて、源八橋の西詰を右手北側に折れ、小さなスロープを壁縁に下りる。川沿いの散歩道を北側へ進むと、③日羅公之碑が御影石で建てられている(天満橋二丁目1番地)。建之は昭和30年6月と刻まれている。日羅公(?-583)は、6世紀に朝鮮半島の百済国王に仕えた倭人系官僚。生まれは肥後国(現佐賀県)。父は大伴金村に仕えた武人。敏達天皇の要請で帰国し、百済に不利な内容を奏上したと疑われ、難波で暗殺され、最初に埋葬されたのが、ここから200m西であった。のち故郷へ移葬された。石碑を眺めていると、JR環状線の列車が橋を渡る通過音がやたらと騒がしい。上空は、航空機が伊丹空港へ下降する航路にあたり、昼間はジェットエンジンの音も聞こえる。



石碑の北側には、源八渡し跡の碑がある1936(昭和11)年6月に橋が架けられるまで、渡しの船着場であった。江戸時代から、兩岸の堤に桜並木が続き、花見客で賑わった。

つぎに、源八橋の西詰を南側に進む。林野庁近畿中国森林管理局の掲示板に、周辺案内図があり、大剣連事務局のある紅梅町から堀川小学校までの道筋と途中の見どころを確認する。川辺りへの階段やスロープを下りながら、桜の香りに酔い、こころ癒されるひと時を楽しむ。

ここの堤防は、④桜並木・豊臣時代の大川堤防(木村堤)。1585(天正13)年、豊臣秀吉が城下町の大坂を建設するにあたり、天満に本願寺と寺内町を置いたことが、現在の天満の街並みの始まりである。少し南側のOAPプラザのあたりには、かつて豊臣氏家臣であった木村重成の屋敷地であったと伝えられ、江戸時代の地図には川沿いに木村堤と記された。豊臣秀頼の小姓として仕えた木村長門守重成(1593?-1615)は知行3000石。1615年の大坂夏の陣の戦いにて、東大阪の若江で戦死した青年武将である。対戦したのが徳川方の藤堂軍・井伊軍であった。



江戸時代に入り、この地には伊勢國津藩藤堂家屋敷が置かれ、庭には桜が多く植えられていた。藤堂家といえば、藩祖の藤堂高虎(1556-1630)は、城づくりの名手であり、七人の主君に仕えた世渡り上手。幕末でも鳥羽・伏見の戦いで旧幕府軍から新政府軍へ寝返ったと噂になった。また、幕末の藩主・藤堂高猷(たかゆき、1813-1895)と実弟の豊後岡藩主の中川久昭(1820-1889)とが、江戸の剣豪たちを互いの江戸藩邸へ招いて競わせるなかで、鏡新明智流四代・桃井直正(1825-1885)を最良としたことでも剣術と縁があった。このシリーズの第1回でご紹介した建国寺の桃井道場が少し南側に開かれたのは、まったくの偶然ではないだろう。因みに、筆者は昨年2025年11月24日、桃井直正公生誕200年祭(羽曳野西墓地)に、桃井家ゆかりの方々とともに参加した。

この地には、現在、敷地北半分に⑤OAPプラザ、南半分にOAPレジデンスタワーがそびえ立つ。プラザ内部には、北半分に帝国ホテルと有名店のホテルプラザ、中央に吹き抜けの桜広場、南半分には飲食店がある。春には兩岸の桜並木が満開となり、景色を楽しむ多くのひとで賑わう。天神祭には、ホテルの1階ロビーが宿泊客で非常に混雑する。南半分の1階には7月天神祭前に多くの提灯が飾られる。プラザ内には冷暖房の空調が施され、散歩途中の立ち寄りに便利で、桜広場にはベンチで休憩もできる。

桜広場の東出入口の階段から降りると、大川に面して水上バスの船着場がある。反対に桜広場の西出入口の前には、左植込みに旧製錬所正門の門柱の説明板がある。ここは、OAPが開発されるまでであった旧三菱金属大阪製錬所の跡地にあたる。



1891(明治24)年に発足した宮内省御料局生野支庁付属大阪製錬所を、1896(明治29)年三菱合資会社が払い下げを受け、その後約100年にわたって金・銀・銅等の非鉄金属の精錬を中心に操業した。ちなみに、三菱の創業者は、幕末・明治の時代の岩崎弥太郎(1835-1885、土佐出身)であった。三菱の前身であった九十九(つくも)商會は、土佐藩邸(現、土佐稲荷神社、西区北堀江4丁目9-7)に置かれ、その地は明治維新後、岩崎の屋敷地となった。

さて、OAPプラザの南館の西出入口から出て、植え込み沿いに左に折れ、郵便ポストを右手に見ながら、角のコンビニ前を西へ向かう。左手南側にある放送芸術学院専門学校前の交差点を西へ渡る。

この道は東寺町通。この道の左手南側は、江戸時代、町人地であった大坂三郷(天満組・北組・南組)の天満組に設けられた町家の北限で、右手北側には寺町が東西方向に一列に設けられ、さらに北側には大坂町奉行配下の天満与力・同心の屋敷地が設けられた。これらの建物が大坂城の北側にあたる天満の地に設けられた理由は、大坂城が敵に攻撃された際に北側の防衛を目的とする外郭として機能することが期待されたからだ。

北側の歩道路面には、レンガづくりの四方形が、一定の間隔を開けて埋め込まれている。これらは伝い石といい、大阪市が整備した大阪市顕彰史跡を歩いて回る大阪市史跡連絡遊歩道、通称「歴史の散歩道」の目印として敷かれている。色合いは昔のレンガの四角枠にレンガの逆卍。加えて、新たに四方形の灰青色の縁取り中に白字の逆卍の埋め込みも見られる。



寺町通を東から西へと進む。歩道の南側の松ヶ枝町側には桜和高校の北門と西側にグラウンドの高いネットが見える。歩道の北側は同心一丁目。その右手には聚松山⑥**専念寺**(浄土宗、本尊阿弥陀如来(平安時代の定朝様、大阪市指定有形文化財)、同心一丁目1-5)。7月はじめ、塀際にオレンジ色の**エンゼルトランペット**の花が見事に咲く。1583(天正11)年に天誉滴翠(てんよてきすい)上人が、大坂松江町(現、中央区北新町二丁目・南新町二丁目・徳井町二丁目)に創建した。大坂夏の陣後の1616(元和2)年に太政官命により現在地に移転した。その後、1837(天保8)年の大塩焼け、1945(昭和20)年の大阪大空襲と、数度の火災で焼失の度に再建された。ここは圓光大師(浄土宗の宗祖**法然上人**)ゆかりの大坂二十五ヶ所靈場第6番

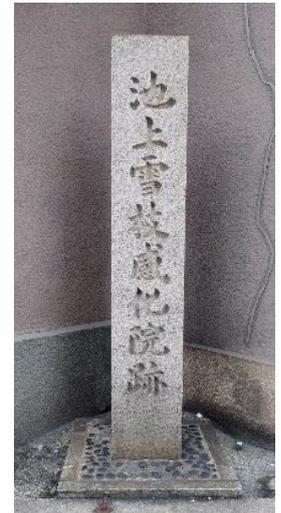


で、山門(薬医門、幕末の再建)の右手東側に石碑がある。靈場としては、現在活動をしていない。1653(承応2)年に江戸幕府の第二代將軍**徳川秀忠**の御靈屋(位牌堂)が建立されて以来、歴代將軍の位牌を安置し、大坂城代が毎年代参されるという寺歴をほこる。大阪新四十八願所第十番。現在は山門を閉じ、通常非公開。

つぎの信号のある交差点で南北の道は**金屋町筋**。これをまっすぐ西側へ越えると右手に常照山**大信寺**(浄土宗、本尊阿弥陀如来、同

心一丁目2-27)がある。ここは1605(慶長10)年に眞誉上人によって備前島(現在の都島区網島町)に創建されたが、1619(元和5)年に現在地に移転した。その後、この寺も1837(天保8)年の大塩焼け、1945(昭和20)年の大阪大空襲と、数度の火災で焼失の度に再建された。その東側にはタワーマンションが続く。

つぎの辻で南北の道は**岩井町筋**。辻の南東角に⑦**池上雪枝感化院跡**の碑(松ヶ枝町3-20北西角)が建つ。彼女(1826-1891)は社会事業家で、日本初の感化院(児童自立支援施設)とされる池上感化院の設立者である。若いころに京都の近衛家で尊王思想に影響を受け、結婚後、大阪で易断をはじめた。易断を通じて明治維新後の社会的混乱に触れ、過ちを犯した若者の救済と再教育をめざして、1883(明治16)年に感化院を開き、翌年この地に移転され、授産所も建設した。生徒は英語教育を重視し、洋傘、石鹼、ステッキの製造等の職業教育も行ったが、経営難で1888(明治21)年に閉鎖となった。生徒たちは、彼女に触発された**侠客・小林佐兵衛**(1829-1917)が開いた小林授産場に引き取られた。



辻の北東角には蓬萊山⑧**龍海寺**(曹洞宗、本尊は釈迦牟尼仏、同心一丁目3-1)。大坂城鎮護(火防)の寺。門前右手前に**緒方洪庵墓所**の碑。お参りしたいのだが、現在は非公開で、参拝・拝観も原則不可。墓地には幕末の蘭方医で近代医学の功労者・緒方洪庵夫妻の墓、適塾門下の**大村益次郎**(ますじろう)の**足塚**、洪庵の師・**中天游**(なかてんゆう)夫妻の**墓碑**がある。

中天游・緒方洪庵・大村益次郎と師弟三代がそろっている。これは偶然ではない。洪庵は恩師・中天游を慕ってここに墓を建て、遺髪を収めた。洪庵の墓の傍には弟子・大村益次郎(1825-1869、蘭方医、幕府講武所教授、日本陸軍の創始者)が刺客に襲撃された後、手術で切断した右足が葬られた。これも益次郎の遺言により、洪庵を慕い墓の横に埋められた。



ここで、少し大坂の蘭学発展の流れを追ってみよう。中天游(1783-1835)の師匠は**橋本宗吉**(1763-1836)で、記憶力抜群の傘職人であった。そのため、京都の医師・**小石元俊**と大坂の天文学者・**間重富**(長涯)とが共同出資で、江戸の**大槻玄沢**の私塾・芝蘭堂で学ばせた。宗吉は、のちに大坂蘭学の祖と言われた。

天游は江戸の芝蘭堂に入門、のちに京都に移り住んだ芝蘭堂四天王の一人、**船村三伯**のもとで蘭学や蘭方医学を学んだ。三伯の娘と結婚し、大坂に移り、妻と医所を開いた。天游は医学より究理学(科学・自然哲学)などのほうを好み、蘭学に熱中した。その後、大坂に芝蘭堂四天王の橋本宗吉が開いた私塾・絲漢堂(しかんどう、現、中央区南船場三丁目3-23)で学んだ。絲漢堂で学びながら、私塾・思々斎塾を大坂・阪本町(現、西区京町堀二丁目)に開き、緒方洪庵

らを輩出。

緒方洪庵(1810-1863)は、日本近代医学の祖で、種痘を広めた蘭方医。彼の私塾・**適塾**は、のちに大阪大学医学部へと発展した。門人に大村益次郎・橋本左内(さない)・**福沢諭吉**・長与専斎(ながよせんさい)・大鳥圭介(政治家)・佐野常民(日本赤十字社初代総裁)・高松凌雲(日本における赤十字運動の先駆者)・本野盛亨(読売新聞社創業者)・手塚良仙(**手塚治虫**の曾祖父)・久坂玄機(玄瑞の兄)など。この適塾は、幕末維新时期をリードする偉材を多く輩出した。

洪庵は1838(天保9)年に長崎から戻り、大坂の津村東之町(現、大阪市中央区瓦町三丁目)で医業を開業と同時に蘭学塾「適々斎塾(適塾)」を開き、1845(弘化2)年に過書町(現、大阪市中央区北浜三丁目3-8)へ移転。1849(嘉永2)12月には、大坂の古手町(現、大阪市中央区道修町四丁目)に「**除痘館**」を開き、牛痘種痘法による切痘を始めた。1860(万延元)年適塾を南の尼崎町1丁目(現、大阪市中央区今橋三丁目)に移転。1862(文久2)年に幕府の西洋医学所頭取として出仕の要請を受け、**奥医師兼西洋医学所頭取**として江戸に出仕し、江戸で亡くなった。

さて、話を散歩に戻しましょう。寺東側の壁沿いの道は**壺屋町筋**。北に向かってわずかに右の東へ傾いている。これは、江戸時代の防御構造である曲がり道の名残り。市内で見られる場所は大変珍しい。



このまま寺町通の北側の歩道をさらに西へ、第二東寺町ビル7階に日舞・音羽流の稽古所の看板を見ながら進むと、群雲山**瑞光禅寺**(臨済宗妙心寺派、本尊は釈迦如来、同心一丁目4-3)がある。北区唯一の臨済宗妙心寺派禅寺。度々の火災罹災から復興、本堂は1863(文久3)年の再建。境内は一般公開されていない。

その隣の長徳寺ビルを越えると、増輝山安養院**九品寺**(くほんじ、浄土宗、本尊は阿弥陀如来、同心一丁目4-8)。一般参拝を受け付けておらず、山門は常時閉鎖されている。そのため、見ることはできないが、墓地には大坂儒学の先駆者・**五井持軒**の墓がある。五井持軒(1641-1721年)は、江戸時代中期の儒学者。その三男の五井蘭洲(1697-1762)は、江戸時代中期の儒学者、国学者で、懐徳堂でも講義した。その

家系は、奈良時代の藤原北家の藤原魚名(左大臣)に遡り、十世孫守貞の弟守康より代々大和国五井戸(奈良県香芝市五位堂)等を所領としたが、1565(永禄8)年に**永禄の変**が起こると五井戸に逃れた。その後、蘭州から遡って曾祖父守香の代に大坂に移住した。因みに、大阪府豊中市に鎮座する服部天神宮の境内には「川辺左大臣藤原魚名公の墓」が残る。

ところで、永禄の変をご存じだろうか。高校の教科書でもこの用語は載っていない。しかし、剣豪ファンの間ではよく知られた出来事。ときは1565(永禄8)年5月19日、室町幕府の13代将軍・**足利義輝**(1547-1565)が三好義継や三好三人衆、松永久通らの軍勢によって、京都・二条御所を襲撃され、殺害された事件。木下昌規『足利義輝と三好一族 崩壊間際の室町幕府』戒光祥出版〈中世武士選書45〉(2021年)によると、義輝は、**剣豪**として名を馳せていた**塚原卜伝**(ぼくでん、1489-1571、鹿島新當流)から指導を受けた直弟子の一人である。その根拠は、後に**柳生宗矩**(やぎゅうむねのり、1571-1646、徳川将軍家の兵法指南役で大和柳生藩初代藩主)が細川忠利(1586-1641、肥後国熊本藩初代藩主)に門弟である雲林院弥四郎(うじいやしろう、1581-1669)を推挙した際の書状において、上方における卜伝の直門として弥四郎の父・雲林院松軒と共に、義輝と**北畠具教**(ともりのり、**1528-1576**、**伊勢国司で戦国大名**)の名を挙げているからといわれる。新當流の伝承では、卜伝が奥義である「一之太刀」を「唯授一人」伝授した相手は北畠具教としている。

九品寺の堀を過ぎると信号のある交差点で、ここの南北の道は**河内町筋**。交差点の南東角のコンビニと南西角のうどん屋を目印に左手南側へと進む。先ほどの寺町通りから南に入ると6階建て以上の建物が急に増えて、空が狭く感じる。この道の右手西側の区画は**紅梅町**で、名の由来は、「紅梅」の名前は、菅原道真が愛した花である紅梅に由来する。この境界は、江戸時代には大坂城に付属した破損同心の屋敷地であった。交差点から南側の1区画めの辻を右手西側に入ると、乳幼児教育の日本教育図書株式会社(紅梅町5-2)のビル。もとの河内町筋に戻って、2区画めの北東角には、プラモデルの戦艦大和を飾るドライマウント・フォトセンターに目がひかれる(紅梅町1-22 コンフォート大阪天満宮1階)。筋向かいには木の香りのする珈琲店(松ヶ枝町6-12ビル西側)。

さらに南へ進むと、信号のある交差点にでる。ここの東西の道は**溝之側筋**で、西へまっすぐ進むと、阪神高速道路下の堀川筋を越えて、梅田の南方にある有名なお初天神の**露天神表門筋**に繋がる。さっきの信号を南側へ渡ると、右手西側に**⑩大剣連事務局**が5階に入る若杉センタービル別館に到着する。

今回はいかがでしたか。つぎは5月に事務所から大阪メトロの北浜駅までを予定しています。
ではお楽しみに。